



Vol. 62

CONTENTS

- 【コラム】情報教育への新しい期待… 川合 慧
【解説】プログラミング教育における反転授業の試み… 高井 久美子 水谷 晃三
【解説】記述式解答の採点支援・自動採点に向けて… 中川 正樹 平井 佑樹

COLUMN

情報教育への新しい期待



次期学習指導要領では情報の扱いが大きくなる。プログラミングへの言及も重みを増している。また、情報学分野の参照基準も作られ、時代が大きく動いていると感じている中で、若干の振り返りを試みたい。

かなり前のプログラミングシンポジウムの席でこんな話を聞いた。「今の大型機のOSは、新宿の街中を歩いている人に「作ってみませんか」と声をかけて集めたような体制で作っている。情報の教育も必要に応じてやればよい」。また、30年前に当時の文部省に計算機教育の重要性を説きに行った場で、担当者に「私が受けたPL-1の2週間講習程度で十分では？」と言われたこともあった。初中等における体系的な教育の話など皆無に等しい時代であった。

高等学校における教科「情報」が開始された年の学会誌に、情報教育が「伝統的基礎学問ではない」という理由で疎外されている状況を嘆いた記事を書いた。教科「情報」については、「伝統的基礎学問」を担当する先生方と高等学校関係者の両方から、ありとあらゆる疑問や反対意見が寄せられていた。そのような中で、情報分野の著名な先達のお一人からこの記事に対するご意見をいただいた。いわく、量（問題規模）の問題は物理学には適わない、高等学校のどの科目を情報の代わりに追放するのか、モデル化には経験が必要なので情報の教育は大学に入ってからがよい、情報の偉い先生方は社会への働きかけもせずに過ごしている、等々であった。

筆者は、まだ情報関連学科もまばらな時代を過ごした。尊敬すべき先達は数多く、その方々なくしては今日の（情動的）状況になり得なかったことは明らかである。このような一騎当千の先達の方々はほとんど独力で道を開けてきたが、その過程はまさに自助努力そのものであったが故に、後進に対する体系的な教育そのものを考える暇もほとんどなしに活動されたであろうことは想像に難くない。個人的感触ではあるが、本会の中でも、このような事情を背景とするとと思われる情報教育軽視の風潮が強かったように思う。

本会でも、1988年に「コンピュータと教育研究会」が、1998年に「情報処理教育委員会」が、それぞれ設置されて以降、教育の問題にも本格的に取り組む体制が整備され、情報教育に真摯に向き合い活動を続けている若い研究者も多くなってきた。近年の、特に情報に関連する委員会と研究会に集っている多くの若い方々の活動に敬服し、大きな期待を持つものである。

川合 慧(放送大学)